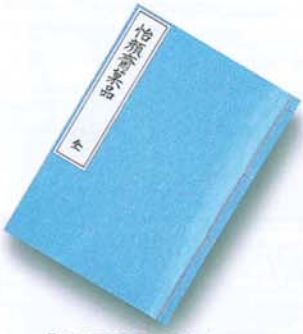
江戸時代の花たち ⑪

書物に見る
江戸時代の園芸文化

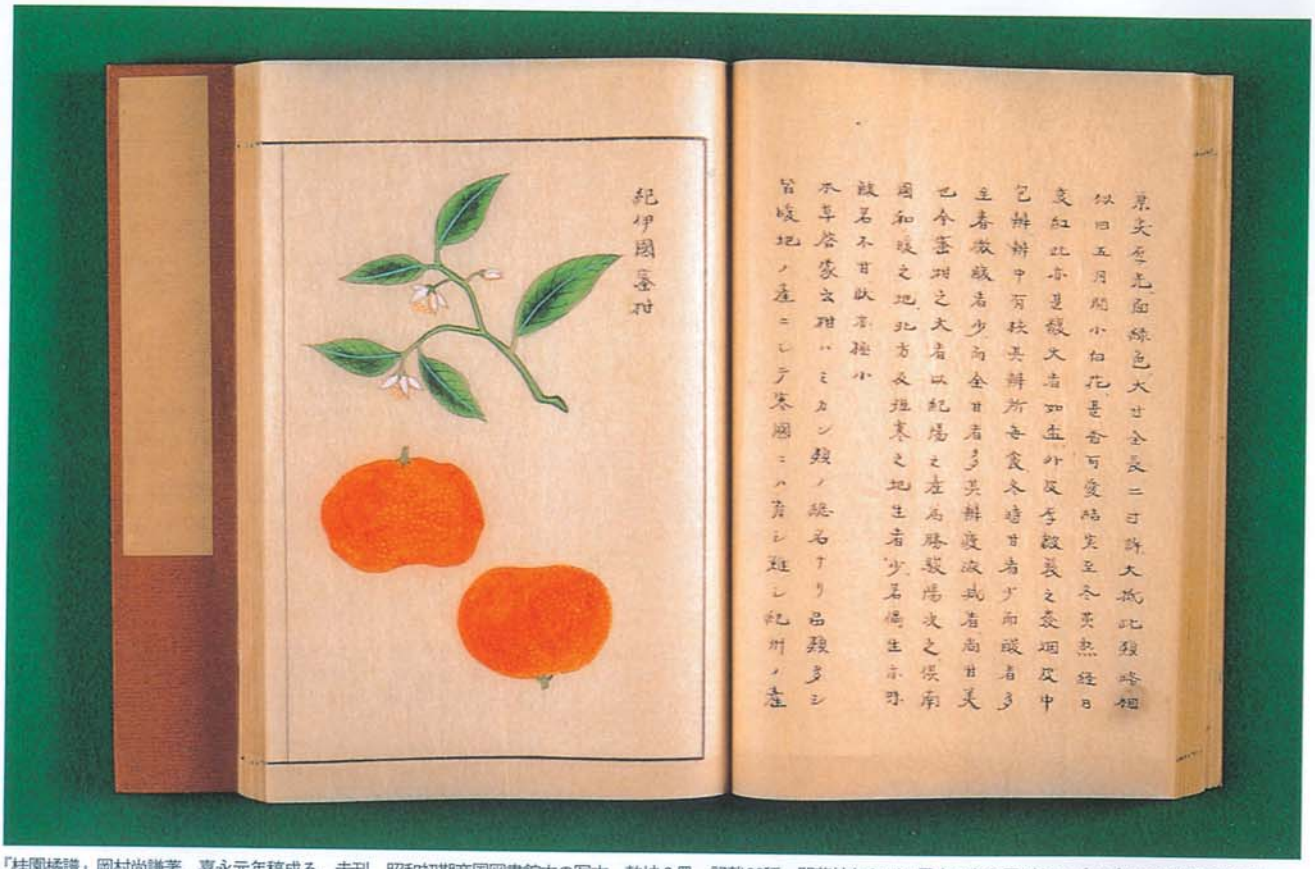
小笠原 亮

紀州みかんはブランド品



『怡顔齋菓品』松岡玄達編著。宝暦8年稿成る。未刊。昭和10年岩瀬文庫本の写本。1冊

『和名類聚抄』源順編著。承平元年成立。元禄頃大坂渋川清右衛門刊。20巻5冊本



『桂園橘譜』岡村尚謙著。嘉永元年稿成る。未刊。昭和初期帝国図書館本の写本。乾坤2冊。記載23種。開花枝ならびに果実の彩色図がある（いずれも雑花園文庫蔵）

日本人と果物の関係は古く、平安朝初期、源順によって篇著された『和名類聚抄』巻一七菓蓏部によれば、菓は樹木になる果実を指し、石榴、梨子、栗子、杏子、林檎、桃子、李子、棗、橘、橙、柚、梅、柿、鹿心柿、枇杷などが並び、蓏は瓜類一〇種のほか菱子、覆盆子、郁子、蔔子、茄子など現在では蔬菜に分類するものも入っているが、菓のうちいずれが重要な作物であったかはこの資料からは判別しにくい。時代は下って江戸中期、京都の本草学者、松岡玄達によって編著された『怡顔齋菓品』は題名のごとく菓類のみが論説編集された最初の文献である。内容は最も記載の多いのが柑橘類で一二六種（重複もある）があり本書の三分の一を占めるなど重要視しており、次いで柿が三九種、桃が二三種、梨が八種と続く。

さらに時代が下り嘉永初年、岡村尚謙著『桂園橘譜』は本格的な柑橘専門書であり、図譜でもある。内容の一部を紹介すると、「紀伊国蜜柑は即大柑子なり　大鏡（には）此種従前紀伊国有田郡に産する物を以て最上とす　形大にして柚の如く肌粗にして其瓤おのづから分離し、味甘く核少なし全く核なきもあり（中略）今　紀伊殿より毎歳十月有田郡の産を（将軍に）奉じる。其他松平采女正、松平肥前守、板倉内膳正　大久保加賀守　大久保出雲守等より各国産を江戸に奉る（後略）」　紀伊国屋文左衛門によって紀伊のミカンは名を馳せ、そのうえ紀州公から将軍に献上されることにより紀伊国蜜柑、有田蜜柑は超ブランド品として江戸の果物の王様となった。

※かっこ内は著者補

1 写真提供／小笠原亮